幼児教育におけるリトミックのインクルーシブ教育への示唆

――小林宗作におけるリズムと社会の関係に着目して――

基礎教育学コース　　相　田　ま　り

A implication of Eurhythmics in Early Childhood Education for Inclusive Education

――Focusing on the relationship between rhythm and society in Sosaku Kobayashi's educational theory――

Mari AIDA

This paper reveals the significance of Eurhythmics for Inclusive Education by analyzing Sosaku Kobayashi's educational theory. Eurhythmics was developed by Émile Jaques-Dalcroze and introduced for Japan by Kobayashi in the Taisho period. Previous studies say that Kobayashi's educational theory of Eurhythmics is useful for a personal development. But he also says that Eurhythmics is effective for social relationships. This study focuses on the relationship between rhythm and society in his theory and analyzes the significance of Kobayashi's theory, especially its potentials and problems.

目　　次

1　はじめに
　A　本稿の目的
　B　先行研究の状況と本稿の視座
2　ダルクローズのリトミック教育論
　A　ヘレラウの教育思想
　B　ダルクローズの問題意識
　C　リトミックがもたらす他者との調和
3　小林宗作のリズム教育論
　A　心身の調和
　B　自然との調和
　C　「全人教育」としてのリズム教育論
4　小林宗作のリズム教育論におけるリズムと社会
　A　リズムによる社会の統一
　B　リズムに込められた意味とその危うさ
5　おわりに

1　はじめに

A　本稿の目的

本稿の目的は，小林宗作（1893-1963）の幼児教育論におけるリトミックの意義をリズムと社会の関係という観点から読み解き，インクルーシブ教育に対する示唆を得ることである。

小林宗作は，大正新教育の潮流の中で日本にリトミックを紹介し，成城幼稚園をはじめとする数々の場で実践し，その普及に努めた人物である。特に自身の創立したトモエ学園（東京・自由ヶ丘，1937-1978）は，1981 年に出版された黒柳徹子の著書『窓ぎわのトットちゃん』でそのユニークな実践が紹介され，話題となった。

本書には，主人公のトットちゃん（黒柳）をはじめ，いまで言う発達障害や身体障害など，様々なハンディキャップを背負った子どもたちが登場する。小林は，数々の「問題行動」を起こしては大人たちを困らせていたトットちゃんに「君は，本当は，いい子なんだよ」と語り掛ける。また，身体的なハンデを背負った泰明ちゃんや高橋君のコンプレックスを取り去るため，様々な工夫をする。こうしたトモエ学園での日々の光景の中には，子どもを一定の枠にはめず，一人ひとりとじっくり向き合い，その子に合った教育方法を模索する小林の姿がある。近年黒柳の半生を描いたTV ドラマが放送されたこともあり[1)]，トモエ学園と小林に再び関心が寄せられているが，こうした小林の実践には，現代のインクルーシブ教育に通じる側面がある。

一方で，小林が実践したリトミックも現在，インクルーシブ教育の文脈で注目されている。リトミックとは，音楽に合わせて体を動かすことで体の発達を促し，感受性や想像力などを育むことを目的とした教育方法である。リトミックはこれまでも音楽療法の一つとして用いられてきたが，最近では発達障害との関連で，自主性や社会性などを育む効果が期待されている[2)]。

このように現代のインクルーシブ教育とも言うべき教育を行っていた小林であるが，これまでリトミックを中心とする小林の教育論は，もっぱら個人の発達にかかわる側面から捉えられ，他者との関係や社会とのかかわりについては十分に論じられてこなかった。

B　先行研究の状況と本稿の視座

小林に関する主な研究としては，小林の生涯をまとめた佐野（1985）のほか，小林恵子（1978），福元（2004），江川（2013）などがある。小林恵子（1978）では，成城幼稚園の設立経緯と教育方針，小林の基本的な幼児教育観などが明らかにされている。福元（2004）では，成城幼稚園と小林の教育方針が，当時都市部に誕生した新中間層の家族の教育要求と一致していたことが指摘されている。また江川（2013）では，小林の理論が「自然リズム」と「芸術リズム」の関係という視点から分析されている。

これらの研究では，小林がリトミックを通じて心身の調和や自然との調和を目指していたこと，それを音楽以外の芸術領域（図画，手工，舞踊など）にまで広げ，独自の理論として「総合リズム教育論」を展開したことなどが明らかにされてきた。また，それらの実践が音楽や芸術教育にとどまらず，人間形成そのものに通じるものであったことも指摘されてきた。しかし，小林の実践をインクルーシブ教育の視点から捉えるとき，より重要なのは，リトミックと社会の関係について検討することである。小林は「リトミックは……社会を高めるもの」[3] であるとして，リトミックが他者との関係や社会のあり方にも関係していることを示唆している。したがって本稿では，小林のリトミックを社会とのかかわりという視点から捉え，その意義を明らかにすることを試みる。

なお，本稿では以下の手順で検討を進めていく。はじめに，小林の理論の土台となるエミール・ジャック＝ダルクローズ（1865-1950）の思想を，彼がリトミックを実践したドイツの田園都市ヘレラウの構想とあわせて確認する（第 2 章）。続いて，リトミックの個人の成長にかかわる側面を，心身の調和と自然との調和という二つの観点から説明し，それらが全体として人間形成論をなしていることを述べる。その際，他者との関係への糸口となる感受性の教育に着目する（第 3 章）。これらを踏まえて，リトミックにおける社会とのかかわりについて，小林が自身のリズム教育の先にどのような社会像を描いていたのか，またそこにどのような課題があったのかを明らかにする（第 4 章）。最後に，本稿のまとめと今後の課題を示す（第 5 章）。

2　ダルクローズのリトミック教育論

小林は，その理論の多くをダルクローズに負っている。スイスの作曲家であり音楽学校の教師でもあったダルクローズは，音楽に必要な感性を養う方法としてリトミックを考案するが，その背景には，当時の社会の状況に対する危機感や未来に対する展望があった。本章では，ダルクローズがリトミックを実践した当時の社会の状況を，先行研究を参照しながら概観した上で，ダルクローズがリトミック教育によって何を目指していたのか，その意図を明らかにする。

A　ヘレラウの教育思想

ダルクローズの考案によるリトミックはリズムを原理とする教育法であるが，リズムは当時の新教育や芸術教育運動における鍵概念の一つであった。山名淳が述べているように，19 世紀から20 世紀への転換期，「リズムと身体に関する新しい芸術が志向され，モダンダンスの誕生へと連なるいくつかの重要な動向が世界各地にみられた」[4]。ダルクローズが一時期携わっていたドイツの田園都市ヘレラウでの実践も，その一つであった。以下，山名の論考（山名2006）に依拠しながらヘレラウの構想について述べていく。

山名によれば，ダルクローズや小林の生きた世紀転換期は，「都市問題をはじめとする近代化のさまざまな矛盾が露呈」した時代であり，「そのような近代の危機診断にもとづいて生活改革運動と総称される自然志向の一連の対応が生じた」。生活改革運動とは，この時期に生れた「衣・食・住を中心として人間生活の諸条件を改善する」一連の取り組みのことを指すが，その一つに田園都市運動がある[5]。ダルクローズは1910 年から1914 年まで，ドイツにつくられた田園都市ヘレラウに招聘され，そこでリトミックを実践している。

ヘレラウの創設者の一人であるヴォルフ・ドールンは，ヘレラウにリトミックを導入する意義について，「リトミックの実践は，アリュトミーを患う個人の救済のみならず，集団形成にも貢献する」としている[6]。アリュトミーとは，もとは医学用語で，不整脈など「一定のリズムをともなうべき運動が正常でないこと」を意味するが，ダルクローズはこれを「リズムを喪失して精神と身体とに引き裂かれた近代人の状態」を指す言葉として用いている[7]。ドールンはこのアリュト

ミーという近代人の病を治すとともに「集団形成」に資するものとして，リトミックに期待を懸けている。

リトミックが集団形成に寄与するというドールンの発想は，経済学者カール・ビューヒャーの『労働とリズム』(1896年）に依拠している。ビューヒャーは，原始社会において労働が遊びや芸術と未分化の状態にあったことを指摘し，リズムが「人間の喜びを喚起」するとともに，労働において力の節約や増大をもたらすものであったと説いている[8)]。こうしたビューヒャーの考えを踏まえながら，ドールンも「リズムが集団を秩序づけ，集団の力を増大させる」点に着目している[9)]。

このように，ヘレラウにおいてはリズムが近代社会の矛盾を克服する鍵として位置付けられていたのであるが，ダルクローズはヘレラウでの実践について，次のように述べている。

> ヘレラウで大切なのは，有機的な生活形式を創造すること，そして特別な教育をとおしてその地とそこに住む人々を調和へと導いていくことです。そこで重要なことは，リズムをとおして道徳的で美的な構築物をつくりだすことでありますし，また，リズムを社会的機関の高みへと向上させ，最終的に新しい様式を確立することなのです。[10)]

ここには，リズムが社会形成に資するものであることが示されている。リズムは近代人の病（アリュトミー）を治すとともに，人々の関係を調和へと導く。ダルクローズが実践の場としたヘレラウは，このようにリズムによる個人の救済と社会の形成とを同時に追求する場として構想されていたのであった。

B　ダルクローズの問題意識

以上のようにヘレラウは，近代化ないし都市化の矛盾を克服するため，リズムによる個人の救済と社会の調和を実現するという意図の下につくられた。ダルクローズはこうした考えに共鳴し，ヘレラウでリトミックを実践することになる。

ダルクローズのリトミック論は，論集『リズムと音楽と教育』などから知ることができる。以下では，本書の翻訳版に依拠しながら，ダルクローズのリトミック論をとりわけ社会とのかかわりの点から素描したい。

ダルクローズは本書の序文において，「教育者たるものは，彼ら［＝子どもや若人たち］が自分たち自身の人生を生きると同時に，それを他の人々の人生と調和させる手段を身につけるよう，力を尽くさねばならない」[11)] と述べている。また，これに続けて「これからは，自然なリズムの開発を基礎にした精神・身体的教育の果たす役割が……私たちの市民生活の中で重要な役割を演じるようになるであろう」[12)] と述べている。この序文は1919年８月に書かれたものであるが，ダルクローズのこれらの主張の背後には，第一次世界大戦を終えて，社会をどうつくり直していくか，新しい社会をどのように築いていくかという問題意識がある。ダルクローズは本書に収められた論文「学校，音楽，喜び」(1915 年）の中で，次のように述べている。

> 一人前の市民として学業を終えるには，……生の感動を感じとる能力を備えていなければならない。創作力を持ち，他の人々の感動と協和して心動かせることができなければならない。……あの悲惨な時代へ私たちを駆り立てた戦争がもたらしたあらゆる興奮の次に為（な）すべきは，真剣に明日を思い描くことである。[13)]

第一次世界大戦のただ中にあって，ダルクローズは，悲惨な戦争を繰り返さないためには「他の人々の感動と協和して」「真剣に明日を思い描」かなければならない，と考えていたのである。

ダルクローズによれば，戦争で受けた傷は，リトミックにより心身の調和が回復されることで癒される。そうして回復した個人は，「生の感動」すなわち生きているという喜びと実感を感じられるようになる。すると，他者ともその感動を分かち合えるようになる。このようにして他者と感情を共有できるようになった人々が，あるべき明日の社会をともに思い描き，新しい社会を創造していくのだと，ダルクローズは考えていたのである[14)]。

C　リトミックがもたらす他者との調和

以上のように，ダルクローズは新しい社会を築くために各人における心身の調和，そして他者との調和が必要であるとし，そのためにリトミックが役割を果たすのだと考えていた。

しかしなぜ，個人における心身の調和が他者との調和につながるのだろうか。ダルクローズは論文「リトミック，ソルフェージュ，即興演奏」(1914 年）の中で，以下のように述べている。

リトミック教育の目的は，学んだあと，……自分を表現したいという欲求を自分の内に生み出すようにすることである。なぜなら，強い感動を味わえば，人は，自分なりの仕方で，他の人々にそれを伝えたいという欲求を感じるものなのである。私たちは，活力が増せば増すほど，私たちの周囲にも活力を拡げようとするものである。受け取る，与える，これが人間性の大原則である。[15]

ここから，リトミックによってどのような人間関係を築くことが目指されていたかを知ることができる。すなわち，「強い感動を味わえば，人は，……他の人々にそれを伝えたいという欲求を感じる」，「受け取る，与える，これが人間性の大原則である」という箇所である。リトミックにより心身の調和がもたらされると，感覚が研ぎ澄まされ感受性が豊かになり，生きていることや，自分を取り巻く様々なものごとに感動できるようになる。すると，今度はその感動を他者に分け与えたくなる。このようにして他者との関係が結ばれていくのである。

また，リトミックは人と人との関係だけでなく，社会全体のあり方にも関係している。ダルクローズは論文「リトミックと身体造形」(1919 年）の中で，「リズムは，社会の基礎をも成している」[16] とした上で，次のように述べている。

身体と精神の調和とは，ひとつの共同組合に他ならない。そして，学校に始まる組織化を成し遂げた暁には，社会は，自らの喜びや悲しみを，全盛期のギリシャ人が実践していたような，集団的な芸術表現で外に現したいという欲求を自ずと感じるものなのである。この集団的芸術表現は，国民大衆の美への意志そのものの表現である，整った公演を提供してくれるが，そこでは，さまざまなグループが，個人的な作法で，韻律はそろっているがそれぞれに個性的な仕方で，つまりはリズミックに，演技を繰り広げるのだが，リズミック，というのは，リズムこそが「様式（スタイル）を得た人間性（ペルソナリテ）」だからである。[17]

ここでは，リトミックの原理であるリズムが，社会における人間関係のあり方を規定していることが示されている。ダルクローズによれば，個人における身体と精神とは「ひとつの共同組合」であり，有機的に連関して全体を形づくっている。そしてその比喩は，「組織」，「集団」などの言葉で表現されている社会のあり方，社会における人と人との関係にも敷衍される。ダルクローズは，個々人が自由にその個性を発揮しつつ全体としてリズムによって統制されていることを「リズミック」と表現している。

ダルクローズは上の文章を，「この喜ばしさは，……自然に社会性を帯びた生活を築き上げるのに必要な愛他的な性質が花開くのを促すのである」[18] という言葉で締め括っている。個々人が自由に感情を表現しつつ，「私たちの表現の仕方を他の人たちの表現の仕方とユーリトミック的に協調させる」[19] ことによって，他者との関係が開かれ，社会全体が有機的に形成されていく。このように，リズムを原理として個人の自由と他者との協調とが両立した社会を築くことを，ダルクローズは目指していたのであった。

ここまで，ダルクローズのリトミック教育論について述べてきた。ダルクローズにとって，リトミックは個人における心身の調和だけでなく，他者との調和をも目指すものであり，その先には人々が個人として自由に生きつつ協調する，新しい時代の社会像が描かれていた。次章以降では，これらを踏まえて小林の教育論を，リトミックによる個人の教育（第 2 章）と社会の形成（第 3 章）という二つの側面から捉え，その内容を検討する。

3　小林宗作のリズム教育論

前章では，ダルクローズのリトミック教育論が，個人の救済（教育）と社会の形成という二つの側面を持つことを確認した。それを踏まえて本章では，小林がダルクローズから学び総合リズム教育論へと発展させていったリトミックを，個人の教育という側面から捉え，その内容を述べる。その際，心身の調和や自然との調和という目的の根底にどのような意図があったのかについて言及する。

A　心身の調和

ダルクローズも述べていたように，リトミックは心身の調和を図ることを第一の目的とする。小林は1930年の論文の中で，次のように述べている。

リトミック―― とは……リズムに依り，精神を（ママ）肉体との調和と発達を企てた新教育法である。心身のリズム運動に依り，神経作用と整調し，心身の調和と発達を助け，想像力と実現力とを調和し想像力を醒し創造力を発達させるものである。[20]

ここには，リトミックが「心身の調和と発達」を目的としていることが示されている。精神と肉体をつなぐ「神経作用」を整えることで，心に思い浮かべたことをスムーズに身体で表現できるようになり，そのことがさらなる「想像力を醒し創造力を発達させる」，と小林は述べている。

小林によれば，人間の行動はすべて意志や感情の表われであり，心身の調和が取れた状態において，人はその意志や感情をスムーズに体で表現することができる。しかし，心身の調和が崩れると思った通りに体を動かすことができなくなり，「自信が失われ，神経過敏になり，頭脳は混乱して全身の統御ができなくな」る。このように「心」が「肉体」の制約に囚われ自己を自由に表現できない状態が続くと，人は戸惑い，苛立ち，失望する。そうして全身の「リズムがくずれ」ると，やがて「魂の自由が失われて」しまう。この「魂の自由」を失わないために，リトミックによって心と体をつなぐ「神経系統」を整え，心身の調和を回復することが必要となる[21]。

このように，心身の調和という目的の基底には，単に心と体の発達のバランスを取るということではなく，そうすることによって一人の人間として生きる上での「自信」や「自由」を取り戻さなければならないという考えがある。

B　自然との調和

以上に述べた心身の調和は，自然との調和という発想につながる。小林によれば，心身の不調和は，人の心が肉体という自然と乖離してしまっていることを意味する。このことについて小林は，自然と調和した状態で生まれてくる赤ん坊を例に，次のように説明している。

> 生まれたばかりのあかちゃんは，まだ精神はめざめず，肉体の活動からはじまる。筋肉細胞・心臓・肺臓・新陳代謝などの諸活動は，……直接精神には関係なく規則的に反覆されている。
>
> だんだん成長するにおよんで彼の精神も，ようやくねむりからさめ，じょじょに活動を開始されるが，なお肉体の規制をうけないわけにはいかない。われわれの肉体活動は，目や耳にこそ感じなくとも，腕のふり子運動に調子づけられた歩行とともに，筋肉細胞・心臓・肺臓などの諸活動と相和して美妙なるシンフォニーをかなでていることであろう。[22]

ここには，人間は本来自然の一部であると小林が考えていたことが示されている。「筋肉細胞・心臓・肺臓などの諸活動」，「腕のふり子運動に調子づけられた歩行」など，すべての肉体の活動は自然の法則の下で行われている。小林はこのように肉体の諸器官が互いに連関して一つの有機体を形づくっている様を「美妙なるシンフォニー」と表現している。

小林によれば，人間は本来，自然の法則の下で生きる存在である。一日のうちに昼と夜があり，一年のうちに春夏秋冬があるように，われわれを取り囲む自然は「かつてこの序をみだしたことはない」。ゆえに，「われわれの生活もまたこの大しぜんの法則に規制されないわけにはいかない」。しかし，都市化が進行し人間が自然環境から分離されてしまった。人々が心身の不調和に悩むのも，そのためである。心と体の調和を取り戻し，自然との調和を回復することで，自然の法則の下で秩序を保ちながら生きるという本来のあり方に戻らなければならない[23]。それがリトミックの第二の目的であった。

C　「全人教育」としてのリズム教育論

以上に述べたように，リトミックは心身の調和を図り，人と自然との調和を図ることを主な目的としていた。心と体，そして人と自然との調和を目指すリトミックは，小林にとって，音楽や芸術の分野を越えて人間形成そのものをなすものであった。小林はダルクローズから学んだリトミックにルドルフ・ボーデの表現体操やジャン・デュディンの幾何学リズムなどを取り入れて総合リズム教育論へと発展させていくが[24]，これは「全人教育としなければならぬもの」[25] であると，小林は述べている。

小林によれば，総合リズム教育は「リズムの支配を受ける人間の凡ての機能の発達を助け，神経作用を整調し心身調和と発達を助け想像力と実現力を調和し想像力を醒し創造力を発達させる」[26] ものである。感じたことを自由に表現することで，身体能力が発達するだけでなく，自分の意志や感情を自由自在に表現できるという自信が付き，その上に「想像力」や「創造力」が伸びていく。小林はこの総合リズム教育を教育全体にまで広げ，「全人的調和美をもたらすもの」[27] である，としている。

このように小林のリトミックおよび総合リズム教育論（以下，リズム教育）を人間形成論として捉えるとき，小林の教育の根底にある思想が見えてくる。それは，種々の能力が伸びていくその土台には自信がなけ

ればならない，という考えである。この自信は，自分の意志や感情を自由に表現できるということと関連しているが，それは端的に言えば生きているという実感であり，自己の存在そのものが受け入れられているという感覚である。

小林は先に引用した論文の中で，次のように述べている。「生活すること，それはすなわち感動することである」。感動とは，喜怒哀楽様々な感情を抱くことであるが，その根本には「生きている」という実感がある。この感覚は，他者と出会うことから生まれる。他者と出会うことによって「生きている」という実感が生まれ，様々な感情が湧き出し，「こうしてわれわれの感受性がはぐくまれていく」。ゆえに，「個人化した」近代社会において失われてしまった人々のつながりを取り戻さなければならない[28]。

人は他者と出会いコミュニケーションを取ることで，自己を知り，自分が相手に受け入れられていることを実感する。こうした感覚があるからこそ，相手に何かを伝えよう，そのために自分を表現しようという気持ちが湧き起こる。つまり，リトミックが高めるとされる想像力や創造力は，他者とのかかわりがあってはじめて生まれてくるものなのである。小林のリズム教育論には，このように，その根底に他者との関係が内包されていたのであった。

本章では，小林のリズム教育論における個人の教育にかかわる側面について述べた。小林のリズム教育は，音楽や芸術の領域にとどまらず人間形成そのものとして企図されており，その根底には，他者との関係が内包されていた。次章では，この他者との関係に着目して，小林のリズム教育論における社会とのかかわりについて検討する。

4　小林宗作のリズム教育論におけるリズムと社会

前章の最後に見たように，小林がみずからのリズム教育によって伸ばそうとした個々の能力の根底には，自己の存在が受け入れられているという感覚が必要であり，その感覚は他者との関係の中で育まれていくと考えられていた。本章ではこのことを踏まえて，小林のリズム教育論における他者とのかかわり，そして社会とのかかわりについて論じる。

A　リズムによる社会の統一

第 2 章で述べたように，ダルクローズはリトミックが他者との調和的な関係をもたらすと考え，その先に新しい社会の創造を描いていたが，こうした考えは小林にも引き継がれていた。

小林はみずからのリズム教育論の意義について，次のように述べている。リトミックは心身の，そして人と自然との調和をもたらすが，「現代は特に調和の教育が必要な時代である」。なぜなら，「主智的教育の影響」によって「宗教も，道徳も現代人を支配統御する処の力を失」ってしまったからである。しかも同時に，「世界は年々歳々，制限なく膨大して行く」。人々が孤立した状態のまま世界が発展していけば，どうなるか。「私はやがて来るべき時代の，不統一な不調和な乱世を予感して身ぶるいをさえ感ずる」[29]。

このように「主智的教育」を批判した上で，「此の乱世に調和をもた［ら］し統制をもたらすもの」[30] であるリズムによって社会の調和を図ることが必要であると，小林は主張する。なぜリズムが社会に調和をもたらすのか。リズムは社会とどう関係しているのか。小林は次のように述べている。

> リズムは調和をもたらすものである。……リズムは，あらゆる動的芸術の母であるとか，平等と不平等の統一であるとか，多様の統一とか，秩序ある変化とか，自由の中に抑制あり抑制の中に自由ありとか，様々な人達から様々に理論付られているが之等の言葉は悉く調和という事に密接な関係を持つものである，否調和其物だとも云える。[31]

ここで小林は，リズムを「調和をもたらすもの」，「調和其物」としている。前章での議論を踏まえれば，それは自然の法則や秩序と重なるものであろう。

小林によれば，かつては宗教や道徳が人々のつながりを保証し，社会全体の調和をもたらしていた。それらは自然の法則と一致し，世界の秩序を保つものであった。しかし知識偏重の教育の影響で，人々の感性は衰えてしまった。宗教や道徳の復活が見込めない以上，これからはそれらに代わるものとして，リズムによる社会の統合を図らなければならない。これが，小林の言うリズムと社会の関係である。

先述したように，ダルクローズはリトミック教育を通じて，個々人がそれぞれに個性を発揮しつつ他者と協調する社会を実現することを目指していた。こうした社会を小林も思い描いていたことは，「多様の統一」，「秩序ある変化」などの言葉に表れている。そこには，多様でありながらも全体として統一された，まさに音楽の美しいハーモニーのように調和をなした状

態が想定されており，その統一の原理としてリズムが置かれていたのである。

B　リズムに込められた意味とその危うさ

以上に見てきたように，小林はリズム教育を通じて，知識偏重の時代に失われてしまった感性を取り戻し，人々のつながりを回復し，多様な個人が全体として統一された，調和の取れた社会を築こうとしていた。言い換えれば，小林はダルクローズの考えを引き継ぎつつ，リズムに基づく新しい社会の形成を目指していたのであった。

しかし，リズムに基づく社会統合という構想は，現実にそれを実行しようとするとき，ある種の危うさを含んだものとして立ち現われてくる。小林は「リズムの本質」について，ダルクローズの言葉を引きながら次のように述べている。

> ダルクローズはリズムは電気やその他自然の科学的，物理的［な］大きな力にも比すべき一つのエネルギーであり動力放射能因，心霊放射能因であり，各時代を通じて人間の生命を支配して来た永遠の神秘を我々にささやき，思想を高め，自己や他人，人類などの能力を意識させ個人の肉体と精神を統一し，自然と調和し，人と人とを調和させ社会の協和と進歩を促すものであるといっています。[32]

ここには，リズムを自然科学的な観点から捉えると同時に宗教的な力を持つものとする考えが示されている。

上の引用では，「電気」や「エネルギー」といった自然科学の領域に属するものと，「心霊」や「永遠の神秘」といった，どちらかと言うと宗教の領域に属するものとが混在したまま語られている。こうした表現には，鈴木貞美の言う「大正生命主義」[33] の影響が見て取れる。鈴木は当時の世界的な思想状況を分析し，20 世紀への転換期に「自然科学の発展により，信仰の位置が相対的に低下するなかで，自然科学に接近した普遍原理としての生物学的生命，ないしは『生命エネルギー』という観念が浮上し，流行した」と述べている。鈴木によれば，それは「自然科学の側からも，種々の宗教ないしはスピリチュアリズムの側からも唱えられていた」[34]。小林（およびダルクローズ）の言うリズムも，こうした文脈の中に位置付けることができる。

小林は上の引用のように，科学的な根拠を持つ（ように見える）ものに喩えつつ，同時に超自然的な，神秘的な意味合いを帯びたものとして，リズムを捉えていた。しかし，こうした目に見えないもの（力）を原理として社会の統一を図ろうとする考えは，時として個人の価値を集団の目的のために否定するような発想と結び付いてしまうことがある。

たとえば，音楽が集団としての統一感や高揚感を高めるための道具として利用されることがある。第 2 章で述べたように，ダルクローズは第一次世界大戦後のヨーロッパ社会を立て直し，新しい社会を築いていくことを意図していた。こうした思想は小林にも受け継がれていた。しかし，日本はその後日中戦争・太平洋戦争へと突入し，ヨーロッパも第二次世界大戦に巻き込まれていく。その際，ラジオや学校教育などを通じて，戦争へと人々を駆り立てる道具として音楽が利用されたことは周知の通りである[35]。こうしたことを踏まえると，リズムによる社会統合という理念は，感情という人の内面（論理を超えた，あるいは論理以前の）に訴えかけ戦争という共通の目標に向かって人々を動員する，全体主義的なものへと転化する可能性も秘めていると言える。実際に，ダルクローズも小林も「国家」や「民族」といった言葉を用いて社会の発展を論じた文章を書き残している[36]。

また，リズムが生命や自然科学の文脈で語られていたことにも注意しなければならない。先述したように，小林（およびダルクローズ）において，リズムは自然に由来するものとされていた。そこで小林が，人間の体の仕組みを美しく調和したものと捉えていたことを考えると，小林の目指す社会のあり方を肉体の比喩で理解することができる。つまり，人間の体が様々な器官の有機的な連関によって成り立っているのと同じ様に，社会においても，多様な人々がそれぞれの個性を発揮しながら，全体として調和し一つの秩序ある社会をつくり上げていく，と考えることができるのである。しかし，当時自然科学が急速に発展する中で，社会進化論などの影響を多分に受けていたと考えると，そうした社会の構想が，ともすると優生学的な響きを持つもののようにも思えてくる。「感覚の良否は，直接頭脳の良否に関係する」[37]，「どんなに勝れた肉体の所有主であっても，その頭脳が立派でなければ能率を挙げる事は出来ない」[38] などの表現は，「頭脳の良否」や「能率」の良し悪しによって個人の価値が判断されるという意味に取ることもできる。

以上のように小林は，個々人が自由にその個性を発揮しながら，互いに助け合い全体として調和をなす社

会を築くことを目指していた。しかし，そこで想定されていたリズムは神秘的な意味合いを持っており，全体主義や優生学的な発想に結び付いてしまうような危うさを秘めていた。

5　おわりに

以上，小林宗作のリズム教育論を社会とのかかわりという観点から検討した。最後にまとめと今後の課題を述べて本稿を閉じたい。

本稿で検討したように，小林にとってリトミックを基礎とするリズム教育論は，個人における心身の調和，自然との調和だけでなく，他者との調和，そして社会の調和をも目指すものであった。しかし，リズムは神秘的な意味合いを含むものでもあり，リズムによる社会統合という構想は，ともすれば全体主義的な，あるいは優生学的な発想に結び付いてしまう可能性を持っていた。

本稿の議論から得られるインクルーシブ教育に対する示唆は，次の二点である。一つは，リトミックは自己の存在が他者に受け入れられているという感覚をもたらし，互いの個性を認め助け合いながら他者との関係を築いていくことを意図している，ということである。インクルーシブな社会においては，能力に関係なく相手の存在を認め受け入れることが求められるが，小林のリズム教育は，まさにそのような態度を育むものであった。もう一つは，リズムによる社会統合という考えは，全体主義や優生学などの排他的な思想と結び付く可能性も含んでいる，ということである。すべてを包摂する（はずの）普遍的な概念であるリズムは，ダルクローズと小林において，国家や民族などと結び付いて語られていた。こうした歴史を踏まえながら，リトミックの持つ意義と可能性について検討を重ねていかなければならない。

本稿のはじめに述べたように，小林の実践には現代のインクルーシブ教育に通じる面がある。トモエ学園における小林の姿は，上のような発想とは重ならない。むしろ反対に，子どもたち一人ひとりの個性を認め，それを生かす形で能力を伸ばし，互いの違いを受け入れ助け合うことを意図していたように見える。こうしたことの背景には，小林が「リズムの多様性」や「連立するリズム（複リズム）」[39] が重要だと述べていることが関係していると思われるが，この点については引き続き検討していきたい[40]。

なお，今後の課題として，次の二点が挙げられる。一点目は，小林のリズム概念について検討を深めることである。リズムは社会を統合する唯一の原理であるように書かれている箇所もあれば，「リズムの多様性」，「連立するリズム（複リズム）」のように，複数あると読める箇所もある。これらが何を意味しているのか，ダルクローズの思想とあわせてさらなる検討が必要である。二点目は，当時の思想および社会状況に照らして，小林の独自性を明らかにすることである。小林はその理論の多くをダルクローズに負っているが，ボーデやデュディンの理論も取り入れており，また，先述した社会進化論などの自然科学からの影響や，能率など経済的な観念も入り混じっている。第 2 章で述べた生活改革運動とのかかわりも含めて，これらを小林がどのように受け止め，みずからの理論に取り入れていったのかを明らかにすることが求められる。

注

1）NHK『トットてれび』(2016 年)，テレビ朝日『トットちゃん！』(2017年)。
2）たとえば日本音楽教育学会編（2019）第 3 部第 2 章を参照。
3）小林宗作（1956a), p.303.
4）山名（2006), p.76.
5）同上書，pp.8-9.
6）同上書, p.85.
7）同上書, pp.83-84.
8）同上書, p.87.
9）同上書, p.86.
10）同上書, p.91.
11）ダルクローズ（2003), p.xi.
12）同上書, p.vii.
13）同上書, p.127.
14）なお，ダルクローズは論文「リトミックと盲人教育」(1930年) の中で，視覚障害を持つ子どもや大人の教育のためにリトミックが有効であることを述べている。詳細は板野和彦（2015)（日本ダルクローズ音楽教育学会編2015, pp.9-20.）を参照。
15）ダルクローズ, 前掲書, p.77.
16）同上書, p.206.
17）同上書, pp.206-207.
18）同上書, p.208.
19）同上.
20）小林宗作（1930), p.20.
21）小林宗作, 前掲論文（1956a), p.307.
22）小林宗作（1957), p.26.
23）同上.
24）総合リズム教育論の内容については佐野（1985）を参照.
25）小林宗作, 前掲論文（1930), p.27.
26）小林宗作（1931b), p.76

27）小林宗作（1931a), p.52.
28）小林宗作, 前掲論文（1957), pp. 18-19.
29）小林宗作（1929d), pp.19-20.
30）同上論文, p.20.
31）同上論文, p.19.
32）小林宗作, 前掲論文（1956a), p.309.
33）19世紀末から20世紀初頭にかけての思想を大局的に捉えその特徴を分析した鈴木貞美は，この時期のヨーロッパおよび日本において，生命に関する思想が自然科学的な要素と神秘的な要素が関連し合う形で論じられていたことを明らかにしている。詳しくは鈴木（2015）を参照。
34）鈴木（2015), p.127.
35）たとえば戸ノ下・長木（2008）を参照。
36）たとえば小林宗作（1948b），ダルクローズ（1915)「学校，音楽，喜び」（ダルクローズ2003, pp.113-128.)。
37）小林宗作, 前掲論文（1930), p.23.
38）小林宗作（1948a), p.21.
39）小林宗作（1929b), p.47.
40）なお，この点に関連するものとして，江川による次の指摘が挙げられる。江川は小林のリトミック論における「自然リズム」と「芸術リズム」の区別に着目し，小林が後者を子ども自身によって「新たにつくりかえられていく」ものとしていることに意味がある，と述べている（江川2013, pp.123-124.)。この点についても今後の検討課題としたい。

参考文献

引用に際しては，旧字体を新字体に，旧仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。なお，引用文中での［　］で括られた部分は筆者による補足である。

◇一次文献
小林宗作　1927.「リトミック運動の現況」『漠のパンフレット　第１集』，石井漠舞踊研究所文藝部，p.8.
―― 1928-1929.「ダルクローズ氏の韻律教育（リトミック）（一）～（五)」『全人：教育問題研究』，26-32巻.
―― 1929a.「幼稚園教育の可否に就て」『全人：教育問題研究』，33-34巻.
―― 1929b.「リズムへの入門（一）～（二）」『全人：教育問題研究』，35-36巻.
―― 1929c.「造型力を醒す練習法に就て」『全人：教育問題研究』，37-41巻.
―― 1929d.「リズムの教育」『幼児の教育』29 巻 7 号，pp.15-26.
―― 1930.「リトミックに依る教育に就いて」『小学校：初等教育研究雑誌』，48 巻 4 号.
―― 1931a.「リズム的教育」『教育問題研究』60巻，pp.52-55.
―― 1931b.「音楽教育とリトミック」『音楽世界』３巻３号，pp.72-76.
―― 1932.「総合リズム教育とは何ぞや」『教育問題研究』73巻，pp.34-39.
―― 1933.「ダルクローズ式リズム体操」『教育問題研究』82巻，pp.38-46.
―― 1934.「欧米音楽教育界の相」『学校音楽』昭和９年２巻８号.
―― 1942.「新しい健康の創造」『理想日本』１巻（４月号），pp.70-76.
―― 1948a.「新しい体操の創造」『学校体育』１巻２号，pp.20-22.
―― 1948b.「リズムと教育（二)」『幼児の教育』47巻６号，pp.10-14.
―― 1949.「リズムの変形法」『教育音楽』４巻12号，pp.14-17頁.
―― 1956a.「三 リズムによる教育――リトミック――」牛島義友ほか編『現代保育講座２　保育の技術（上）』金子書房，pp.303-325.
―― 1956b.「リトミックとは何か」『学校体育』９号，pp.74-80.
―― 1957.「２　生活リズム」周郷博・酒田富治編『音楽とリズム：幼年教育のために』国民図書刊行会，pp.18-36.
―― 1959.「特集 リズム感とリズム教育　体育のリズムと音楽のリズム」『教育音楽』14巻９号，pp.28-29.
―― 1978.「総合リズム教育概論」『大正・昭和保育文献集　第４巻　実践編１』，日本らいぶらり（初出は1935 年).
―― 1978.「幼な児の為のリズムと教育」『大正・昭和保育文献集　第４巻　実践編１』，日本らいぶらり（初出は1938年).
三野　亮・小林宗作　『保母ノート１』日本社会事業協会, 1948.
小林宗作・板野　平　『子供のためのリトミック　改訂版』国立音楽大学出版部, 1973.
◇二次文献
板野晴子　2011.「小林宗作によるリトミック移入と新渡戸稲造による示唆」『ダルクローズ音楽教育研究』36巻，pp.16-28.
――『日本の音楽教育へのリトミック導入の経緯：小林宗作，天野蝶，板野平の関わりを中心に』風間書房, 2015.
今村方子　2009.「小林宗作『綜合リズム教育』に『子どもから』の教育をみる」『子ども未来学研究』４巻，pp.33-41.
内山菜津子　2019.「小林宗作の音楽教育実践の特徴に関する一考察」『音楽研究：大学院研究年報』31巻，国立音楽大学大学院編，pp.269-276.
江川愛都紗　2013.「小林宗作のリズム教育論：始まりとしての『自然』と媒介としての『芸術』」『東京大学大学院教育学研究科　基礎教育学研究室　研究室紀要』第39号，pp.117-125.
エミール・ジャック＝ダルクローズ　著／板野平監修・山本昌男訳『リズムと音楽と教育』全音楽譜出版社, 2003.
黒柳徹子　『窓ぎわのトットちゃん』講談社, 1981.
小林恵子　1978.「リトミックを導入した草創期の成城幼稚園――小林宗作の幼児教育を中心に」『国立音楽大学研究紀要』13号，pp.75-93.
―― 1979.「幼児教育者としての小林宗作〔２〕：成城幼稚園の少人数教育」『日本保育学会大会研究論文集』32巻，pp.28-29.
―― 1988.「大正期のリズム教育について――小林宗作のリトミック教育」『愛知県立大学文学部論集　児童教育学科編』37号，pp.93-110.
古山律子　2016.「小林宗作の幼児教育思想と保育者養成観：厚生保母養成所時代（1942-1953）を中心に」『千葉明徳短期大学研究紀要』37巻，pp.155-163.
佐野和彦　『小林宗作抄伝――金子巴氏の話を中心に』話の特集, 1985.
鈴木貞美　『「近代の超克」――その戦前・戦中・戦後』作品社, 2015.

田邊美樹　2017.「リトミックと文化の連関を探る：ダルクローズと小林宗作の音楽の始源から」『異文化』18巻，pp.51-62.
戸ノ下達也・長木誠司　『総力戦と音楽文化』青弓社, 2008.
日本音楽教育学会編　『音楽教育研究ハンドブック』音楽之友社, 2019.
日本ダルクローズ音楽教育学会編　『日本ダルクローズ音楽教育学会創立40周年記念論集リトミック教育研究―理論と実践の調和を目指して―』開成出版, 2015.
野村健二　『トモエ学園の仲間たち』三修社, 1983.
『はじめにリズムありき』編集委員会『はじめにリズムありき――私たちの小林宗作先生』もくせい会（厚生保母学園同窓会），1990.
馬場結子　2017.「トモエ学園における自由教育に関する考察：リトミックの系譜」『淑徳大学教育学部研究年報』２巻，pp.29-38.
福元真由美　『都市に誕生した保育の系譜：アソシエーショニズムと郊外のユートピア』世織書房, 2019.
松坂仁美　1987.「幼児教育へのリトミックの導入――小林宗作と天野蝶を中心として」『美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要』32号，pp.36-44.
山名　淳　『夢幻のドイツ田園都市――教育共同体ヘレラウの挑戦』ミネルヴァ書房, 2006.

謝辞

This research was supported by The Early-Career Scholar Training Project Grant, Center for Barrier-Free Education, Graduate School of Education, The University of Tokyo

本研究は，東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター2019年度若手研究者育成プロジェクトの助成を受けたものです。

（指導教員　田中智志教授）